The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	The Making of Global Universities : Japan and International Knowledge Contestation
Author(s)	石川, 真由美
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/60012
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【22】

氏　　名	石　川　真由美（いし かわ まゆみ）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　２５５９５　号
学位授与年月日	平成24年８月16日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学位論文名	The Making of Global Universities: Japan and International Knowledge Contestation （大学のグローバル化：日本と国際的な知識の競合）
論文審査委員	（主査） 教　授　栗本　英世 （副査） 教　授　小泉　潤二　　教　授　平沢　安政

論文内容の要旨

本研究は、高等教育の急速なグローバル化のなかで、「国際化」への道を模索する日本の国立大学（2004年4月以降は国立大学法人）を事例として、知識の国際的競合の諸相と動態を明らかにするものである。今世紀の初頭から、世界の大学グローバル化は新しい局面をむかえ、学生と研究者の国際移動の増加、留学生のもたらす収益を目的とした高等教育市場の拡大、欧州における高等教育の地域統合、世界大学ランキングに代表される国際的な格付けの進行、オフショア・キャンパスやダブルディグリー等の国際教育プログラムの増加などの動きが拡大している。一方、各国政府は「ワールド・クラス」の名声と国際的な競争力をもつ研究開発拠点の確立と人材の獲得・確保を目指し、政策的優先課題として重点大学への集中的資金投下を進めている。本研究はこのようなグローバルな動きへのローカルな対応を分析するために、日本の国立大学法人の国際化に焦点をあてる。主に、リサーチ・ユニバーシティ（研究型大学）における参与観察を通して、政府や実業界による政策的要請や社会変化、激化する国内外での競争、画一的な国際評価指標の濫用や欧米英語圏大学中心の「グローバル・モデル」の成立を、高等教育グローバル化における「周縁」からの視点により分析し、世界的な知識の競合(knowledge contestation)の起源、変容、そして２１世紀における新たな動態局面を考察する。

第1章では、今世紀に入って高等教育のグローバル化が従来とは異なる段階に入ったことを指摘した上で、戦略的な研究の場としての日本の国立大学の位置づけ、研究の目的と意義、理論的な問題意識を提示する。方法論として、現代の「グローバル・モデル」とヘゲモニーの成立の理解に、歴史人類学的な知識構築の研究を援用することを明らかにするとともに、ヘゲモニーのグローバルな波及と周縁に及ぼす意味、知識の競合に影響を与える権力構造理解のための人類学的アプローチに言及する。

第2章“Global 30 and the Redefinition of University Internationalization”は、外国人留学生・教員の受け入れ増と英語による授業やコースの拡大を目標とする「グローバル30」を一例として、80年代以降の大学国際化の新たな意味と国際化を取り巻く社会的な状況変化を明らかにする。従来の政府主導の大学国際化は、主にアジア人留学生の同化を前提とし、ODAなどと本質的には変わらない「援助」を目的とするものであり、その影響は極めて限定的であった。一方、今世紀に入って加速したグローバル化のもとでの国際化の影響力と浸透力は比較にならないほど大きく、既存の社会的規範や秩序を根本から揺るがす可能性をもつ。本論では日本の国際化の「遅れ」を従来から欧米の研究者が繰り返し論じてきた「閉鎖性」や「ナショナリズム」に起因するものとして捉える立場を否定し、伝統的な価値観やグローバル化以前に確立された威信（プレステージ）体系と新しい国際的序列との軋轢に焦点をあてて分析する。ここでは、明治後期以降の独立性の高い国語による高等教育の構築という日本の近代化を支えたいわば財産が、グローバル化のもとで足枷になりかねない状況と日本社会が直面するジレンマを指摘する。

第3章“University Rankings, Global Models and Emerging Hegemony”では、世界大学ランキングに焦点をあて、「ワールド・クラス・ユニバーシティ」という新しいグローバル・モデルの誕生と、ここで援用される極めて単純化された評価指標の濫用によるローカル社会や大学に与える影響を論じる。国際ランキングは、それぞれの大学の多様性と文化的な差異を無視するものであり、データの信憑性と評価手法にも大きな問題がある。このことを格付け会社に対応する大学のエスノグラフィックな記述により明らかにする一方、大学ランキングの濫用がローカルな威信体系や序列、学術の伝統や国語による研究に深刻な影響を与えることを指摘する。また、世界大学ランキングの学術研究の価値を商業ベースの量的手法で計るという、より深刻な側面についても論じる。

第4章 “Universities and the Labor Market’s Quest for ‘Global Talent’”では、従来の大学教育に大きな転換をせまる日本企業の「グローバル人材」への希求、企業内言語の英語化、国内から海外の労働市場にシフトする企業の採用動向とホワイトカラー雇用のグローバル化などの最新動向を分析する。国際化を標榜する企業の採用担当者への聞き取り調査などに基づいて、従来型のローカルな雇用システムと新しいグローバル人材への希求との間のコンフリクトを浮き彫りにする。他方、将来の高度人材の確保のための留学生受け入れの拡大、科学技術の競争力強化のための大学院重点化という二つの政策を取り上げ、政策目標と大学院にみる雇用の現実とのギャップを例に、労働市場をめぐる大学と社会、グローバル化と国際競争力、高度人材教育の意味について重層的に論ずる。

2-4章では現代日本のローカルな社会状況を取り上げたのに対し、第5章 “The Genesis of Knowledge Empire”では、日本の大学に転換を迫るグローバルな力とは何か、その問いの答えを分析における時間軸と空間の拡大によって求める。グローバル・モデルとして趨勢を誇るアメリカの研究大学の歴史的な創生期は、約百年前の華人学生の日本留学ブームとほぼ時を同じくし、この日本留学ブームとその終焉、アジアのエリート学生のアメリカへの留学ルートの確立は、アメリカの研究大学の成立と世界における優位性の確立を背景としていたことが指摘できる。現在のアングロ・アメリカン「グローバル・モデル」の興隆を新帝国主義、あるいは植民地主義の残存・復活とみる論に対して、本研究は完全に異を唱えるものではないが、異なるダイナミクスに注目する。ついては、本章ではアジアにおける初期の「国際化」は日本が中心的な役割をもち、最も早く西洋を範に近代化を達成した日本がアジアの学生のハブとなり、知識の発信地となっていたこと考察する。20世紀初頭の教育の国際化に着目する本章は、現在の大学のグローバル化の起源を検討するとともに、高等教育の国際化を類型論ではなく、現在に続く一つの歴史的プロセスとして分析することを目的としている。

最終章においては、本論でとりあげた日本の大学のグローバル化の動きが、必ずしも日

本に特有かつ固有のケースではなく、グローバルな知識の競合の動態理解のために有効な例となることを論じる。具体的には、以下をもって本研究は論を閉じる。21世紀のグローバリズムの焦点は「人」と「知識」にある。グローバル化の進行のもと、大学には専門的かつ高度の知識のみならず、国際的な競争力と移動性を人材に賦与することが期待される。国際的な人材を輩出、そして獲得するとともに、社会に定着させること、更には、国際的な人材移動のサーキットのなかで「知識」を生産し、新しい価値を構想する力こそが、大学と企業、ひいては社会と国のサステイナビリティの基盤となる。

論文審査の結果の要旨

本博士学位請求論文"The Making of Global Universities: Japan and International Knowledge Contestation"の主題は、日本の主要な国立大学における、21世紀に入ってから急速に進展する高等教育のグローバル化への対応、すなわち大学の「国際化」である。本論文の目的は、「国際化」の分析を通して、世界の知識生産における覇権形成の動態を、20世紀初頭以降の歴史的過程に留意しつつ、日本という「非中心」の場に視座を置き、グローバル化への包摂と抵抗をマクロ・ミクロ両方の視点から重層的に理解することである。方法論的には、人類学を基本としつつ、比較教育学、教育社会学、植民地主義研究、知識の資本主義的生産論などを分野横断的に援用している。本論は、序論である第1章のほか、4つの章と結論から構成されている。第2章では「グローバル30」プログラムを取り上げ、日本の大学における「国際化」の意味とコンテクストの歴史的変容が論じられる。第3章では、大学のランク付けを対象に、グローバルな覇権の成立と容認が日本の大学に及ぼす影響について、批判的に検討されている。第4章は、グローバル人材の養成とナショナルな雇用慣行とのあいだの矛盾と相克の分析にあてられ、第5章では、知識生産におけるアメリカの覇権の確立が、東アジアの場合との対比のなかで論じられている。結論では、「人」と「知識」に焦点がある21世紀のグローバリズムにおいて、国際的競争力と移動性をもつ人材を養成する機関としての大学の重要性が、今後ますます高まっていくことが指摘されている。

本論文は、大阪大学人間科学部国際交流室、次いで本学の国際企画推進本部の教員として大学教育の「国際化」の最前線で勤務した著者自身の経験に基づくものであることは言うまでもない。この意味で、本論文は、インサイダーによる大学という組織のエスノグラフィーである。人類学的観点からすれば、高等教育という新たな研究対象を開拓した点が評価されよう。しかし、本論文が真に優れているのは、著者が自らの苦渋と矛盾に満ちた経験を、インサイダーとアウトサイダーの役割をスイッチしながら、グローバル、ナショナル、ローカルな視点を往復しつつ、広い人間科学的視点から批判的・自省的に文脈化することに成功しているからである。組織の一員として生きてきた人間が、自らが属している組織を研究の対象とすることは、方法論的にも認識論的にも容易ではない。この困難な作業に成功している事実は、著者の研究者としての類稀な資質の証左である。本論文は、大学というシステムの優れた人類学的研究であるだけでなく、グローバル化研究、比較教育学、知識生産論などの分野においても第一級の研究であると評価することができる。

本論文は、「国際化」への圧力のなかで苦闘している日本のすべての大学人にとって必読文献になることが予想される卓越した業績である。また、国際的な水準の英語で書かれている本論文は、日本固有の問題を、グローバルに発信する役割を担うことと期待される。

以上のことから、本論文は博士（人間科学）の学位授与にふさわしいと判断された。